

共産主義者組織統一 準備委員会会報

No. 4

1966年6月15日発行

目次

組織統一準備委員会は遅滞なく政治方針・組織
方針を作成して公示すべきである 堺 新一... 1

組織統一の前進のために 春日庄次郎... 5

九州地方組織統一準備会発足

——結集と統一をめざす九州地方会議..... 9

国鉄中国地方共産主義者統一協議会の懇談会 11

発行所 共産主義者組織統一準備委員会

事務所：東京都新宿区四谷2の1 電話(353)8664
日本共産党(日本のこえ)内

組織統一準備委員会は遅滞なく政治方針・

組織方針（案）を作成して公表すべきである

堺 新一（大阪）

三月に「共産主義者の結集と統一をめざす全国会議」がもたれてからすでに三カ月たつた。この間に正式の準備委員会（以下準備委とよぶ）は三回、その他数回の会合がもたれたように報告されているが、組織統一のために最も重要な政治方針案と組織方針案作成のための委員会は、それを設置するということが決められただけで肝心を起草委員の構成もまだきまつていないようである。これは少なからず意外のことであり、結集のための全国会議に出席した多くの人々の期待に合わない事実だといわねばならない。

われわれの理解によれば、全国会議で選ばれた準備委の主な仕事は、全国会議の以前にも行はれていたような各派のフリートージング的な意見交換をかさねることによつて時間を浪費することではなく、現在なお分立している共産主義者の諸集団を結集する基礎となりその団結を固めることができるような政治方針案と組織方針案を早急につくりあげることにし、かかるのちにこの案を中心に討論を組織し、それを通じて政党結集への具体的展望をひらくということであつたはずだ。問題は準備委が「現在の時点ですぐ何からはじめるべきか」と自ら問題を設定しておきながら、おそらくは準備委内部に存在する意見の相違を考慮することから直ちに方針案の作成にとりかゝろうとせず、当面「まとめ」と「よびかけ」にもとづく「討論の組織化」と「広汎な結集のためのオルグ活動」に全力をあげるべきだとうつたえてきたことのなかにあるように思われる。だがいつたい、この三カ月間にどんな討論が組織されどんな広い結集がオルグされてきたというのか？ よるべき政治方針案も組織方針案も示されないまゝに行なわれる討論や組織活動がどんなよい結果や展望をも生んでいるともいふのか？

準備委のこのような状態は、事実上「早急に二つの委員会の作業をはじめることば、まだ結集していない人びとを無視して準備委が独走する」という結果になり、結集の事業をさまたげる」とのべている準備委内一部の意見への追隨で

あり、大衆斗争の運命に無関心でいられるインテリの傍觀主義・サークル主義の要求への屈伏であるとしかみられない。

「まとめ」と「よびかけ」によつて、結集にお疑問をもつ人々への説得をひろげつよめることは可能であり、有意義なことである、とわれわれも考えている。だがそれは、すでに結集を求めて全国会議に集まつた人たちをさらに前衛政党への結集に向けて思想的政治的に団結させ一歩前進させるといういつそ基本的な課題に従属して、はじめて可能になる課題である。この区別を明確にせずそれをただ「まとめとよびかけの討論」としていつしよくに提起することから、そのような討論は当然「まとめ」と「よびかけ」ですでに到達されている合意事項までを再検討の対象とする後向きの討論にもなりかねない。われわれはただ次のようにする場合にだけ、すなわち「まとめ」と「よびかけ」をふみ台として共產主義者の結集を一つの前衛政党に固めるための思想的・政治的・組織的基礎づくりを具体的におしすすめるなかでだけ、この結集にお疑問をもつ人々を真に説得することができると考える。

(2) まだ結集に参加していない多数の人々がいるとか、「まとめ」に疑問をもつ人がいるとかいう理由をあげて、すなわち共產主義者のあいだにまだ意見の相違があるという理由をあげて、統一党のための綱領（われわれの場合には当面の政治方針と組織方針）を作成するのはまだ時期尚早であると主張する意見は、徹頭徹尾誤つた、本質的に日和見主義的な意見である。歴史的環境に大きな相違はあるが、そうした意見は、イスクラ前期にサークル主義の克服をよびかけたレーニンにしろく反対した人々の意見と瓜二つであることだけに注意を促がしておこう。われわれは意見の相違の存在そのものをおそれる必要は少しもない。反対にこの意見の相違、その内容と性格が明確にされないことから生じ長びかされる混乱が組織統一の事業をさまたげおくらせることだけを心配する。事態を後向きの批判や無責任な論争で混乱させないためには、この討論の中心に、当面の政治方針案と組織方針案の作成という具体的で前向きな課題をもちこむことが無条件に要求されているのである。

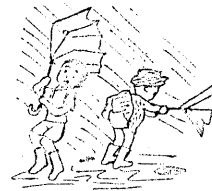
同じことをよりわかりやすくいわしてもらおう。全国会議の「よびかけ」は「日本の政治をかえなければならぬときがきている」とかき「情勢を根本的に転換させる強力で清らかなる政治指導の結集」の必要をうたえている。このこと自体にはだれも異存のあるはずはなからう。それだけにこうしたうたえにはその抽象性からくる一定の限界があるのである。たかひとたび、いつたいうしたら日本の政治を変え、情勢に根本的転換をもたらしことができるのか、というように問題を提起するとき、討論ははじめて具体的に活動強化し、合目的となるのであり、われわれの討論をこうした前向きの軌道にのせるためにこそ、統一党のための方針案の作成が不可欠の急務として要請されているわけである。準備委が右のような方針案を作成して発表する手続きをとるときはじめて、討論全体の空転に歯止めがうたれ、共産主義者のあいだに存在する意見の相違——しばしば誇張されていたり実体のない場合がある——がはたしてどれほど深いものが、それははたして本質的な意見の相違なのか、それとも部分的な問題での相違なのか、一つの党の隊列内で共同して活動することを妨げるものなのか、そうではないのか、が明らかになり、それを克服する方途もまた自ら見出されることになるだろう。

結論をいえば、準備委は、遅滞なく政治方針案と組織方針案を作成して、討論のためにそれを公表すべきである。もし準備委内の意見の相違のため草案起草者を一致してきめることができないような場合には、複数の起草責任者をあげ、複数の草案を作成して発表すればよい。たゞしそのさい、このような文書にともなう政治的責任を明確にするため、意見はもつが自己の基本見解を草案の形で明示しえないような当事者は、当然、起草委のなかに含めるべきではないであろう。われわれが政治責任を負う政党に結集して首尾一貫した活動を行うためには、以上のべたことは最低の手続き上の要請である。

(3) さらに一言追加させてもらうならば、結集のための政治方針・組織方針の作成は、けつしてわれわれのあいだにあるすべての意見の相違を解決するものではないということについてである。この点について、「まとめ」の最後の部分にかゝれている「組織統一の後において引きつずき追求すべき課題と、組織統一の以前に解決すべき課題とを区別し、それ

(4)

を見定めることが必要である」という指摘はきわめて重要であると思う。当面必要を課題は、「まとめ」が明記しているように、「日本の現状分析、日本革命の基本的性格、統一戦線の理論と戦術、共産主義運動の統一と党建設の問題」に限られるべきであり、党史の再検討とか、日本の共産主義運動の歴史的総括（たとい戦後におけるそれであつても）だとか、日本の社会主義への移行形態をめぐる論議などは、党の統一達成後において取上げてもけつしておそくはない問題であるようにかんがえる。



組織統一の前進のために

春日 庄次郎

一 現在、代々木共産党外の共産主義者とその諸集団の全国的統一に関する問題は、これらの共産主義者と関連している革新的民主主義者、活動家の間においても、ますます広く関心と影響をもつてきている問題であります。

われわれの「組織統一準備委員会」は、この動きの一つの具体的な結集形態であります。したがってわれわれの仕事は、この「組織統一準備委員会」に直接、諸集団の結集をはかるのみならず、多様な形で、共産主義者の相互連携、協力をおしすすめる、全体の統一をすすめることによつて、自らの仕事の成功も保障されるのであります。

「組織統一準備委員会」を形成した三月の全国会議は、自らは「政党的形態」による組織結集をめざしつつ、この結集が可能ながぎり広い、連携と協力の上に立つて進められるべきことを準備委員会の任務としました。

三月会議は要約していうと次の三つのことをきめました。その第一は、この三月会議の結集の不十分をみると、さらに未参加、未結集の人々によびかけて、多様多形で協力と共同の作業を通じて組織統一の事業をおしすすめること。その第二は、この結集の基本となる、独自の政治的、組織的立脚点、方針を明確にする共同の作業をひろめ、進めること。その第三は、共産主義運動の革新と新しい前衛党の形成をめざし、思想的に多様に分岐している共産主義諸集団がその目標の実現のため、有効な現実的な政治力として一体をなすために、たとえ「不十分であつても」、さしあつて「政党的形態」をもつて結集するために実際のな準備をおこなうこと。

このことは、われわれの皆、同意、確認したことです。

肝心なことは、この三月全国会議の総意は、この会議の結集状況では不十分であり、この現状のままで独走するのではなく、さらにわれわれの組織統一の事業を、もつと広く、い

わば根の深いものにしなければならぬという認識の上に立つてあるということです。

この三月会議がもたれる準備過程で結集の方法や形態について、いろいろ意見の相違があつたにしても、全国会議の合議と一致は以上のようなものであり、組織統一準備委員会の作業はこの一致の上に進展しているのであります。

今日、準備委員会のなかで意見の相違があるとしても、それは以上のような全国会議の「一致をくつがえしたり、逆行したりするものでなく、この一致に立つて、如何に成功的にそれを実現するかということに関連するものであります。

二代々木共産党あり、社会党がある状況のもとで、われわれが、あらたに、独自の「政党形成」をめざす「組織統一準備委員会」の仕事にとつてもつとも肝心なことは、われわれの独自の政治的、組織的立脚点、プラットフォームを、日本の労働運動、平和運動、民主主義、社会主義運動の現実において充分に説得力のある明確さをもつてあきらかにすることです。それはマルクス主義の科学的方法、すなわち、資本主義から社会主義への移行の現代の世界史的な過程における革命的勢力の現実の力とその可能性を規定する客観的、主体的諸要素の全体の科学的な分析、日本の現状、階級関係、現在の具体的な特殊性等の正確な分析にもとづかなければなりません。こうして、ロシア革命、東欧諸国、中国の革命とは条件のちがつた、高度に発達した国家独占資本主義国日本の社会主義への道を創造的にきりひらかなければなりません。

三月全国会議の「まとめ」と第三回準備委員会の政治方針・組織方針作成の方針はその作業の方向を示したものです。

しかし、この仕事は非常に広い協力と共同の作業を組織することなしにはできませんし、これを共同しておこなうことによつて政治的、組織統一を広げることが可能となります。

- 三 私がここに指摘しておきたいことは、最近代々木共産党が、一方で依然としてソ連共産党を現代修正主義と攻撃しながら、他方、従来、一辺倒であつた中共に対して相対的独自性を示し、「自主独立」的であるかの如くふるまつていくことです。しかし、この代々木の「転換」に対して、われわれ日本の共産主義者はこれに容易に「だまされなう」でしよう。肝心なことは、国家的な形態をとつた両体制間の対立におけるソ連の役割、熱核

戦争の危険をはらんだこの対立において、戦争を阻止する平和のためのたたかいが、世界的な規模における階級斗争の焦点であり、帝国主義国における社会主義のための斗争と民族独立斗争の勝利への展望と不可分であるという現代の情勢の科学的分析を欠き、むしろ熱核戦争も不可避であり、それが世界革命の勝利をもたらすという展望を代々木共産党は放棄していないということです。彼らは、あらゆる社会主義国は核戦力を強化し、軍事的に帝国主義を、戦争の危険を冒しても、圧倒することによつてのみ平和は実現するという中共路線と訣別していいのです。

したがつて、われわれにとつて、代々木共産党とは独自の立場を明らかにし、自らの結集の軸となる一つの重要な問題は熱核戦争の危険をはらんだ現代の国際政治において、平和の維持と社会主義の前進にソ連が果している役割の客観的な正確な評価にかかっているのであります。このことなしには、日本の革命の展望もあり得ないのです。（このことは「日本の平和と中立を云々しつ、ソ連もまた冷戦構造の一翼をなしている」といつたことを主張する論者さえあることを忘れてはならぬ。またソ連とソ連共産党の正しい評価をすることなしには国際権威主義、従主義を克服し、自主自立の正しい立場を確立することも出来な）

四 われわれの独自の政治的、組織的プラットフォームを明確にすることと同時に必要なことは、われわれの政党的結集の**実体的準備**をすすめることです。

われわれの結集について内部において情熱と決意が強まり、外部において、われわれの結党とその活動に期待が高まることなしにはわれわれは発足できない。それには声明や、方針の発表だけでは役に立たない。

われわれの方針がわれわれの組織の内外の討論と参加によつて作りあげられることが必要であります。

それとともに、このような方針がわれわれの組織のなかで体现され、東京、大阪、愛知等、日本の政治、経済、文化の中心にわれわれ組織的足場があり、運動のどの戦線においてか、地域においてか一定の起動力を持ち、既存の組織のワクをこえた融合した活動部隊

が形成され、こうして全国的に、新しい指導中心が形成されて行くような活動がおしすすめられなければなりません。

こうして新しい統一体の実体的な準備が出来あがるように、われわれの努力を集中する必要があります。

すでに以前から要望されているように新しい統一体の新聞の発行も計画され、準備される必要があるでしょう。

とにかく肝心なことは、われわれが、さしあたつて形成する党が「不充分」なものであることを覚悟して出発するものであるが故に、逆にきわめて旺盛なエネルギーがわれわれの組織のすみずみから沸きあがつてくる必要があります。最大限の自発性がいたるところから噴出して来なければなりません。

われわれは「結党」によつて、めざましい進出をすることが出来なくとも、着実に一歩一歩、成果をあげ、政党的評価をかちとつて行きうるような体勢を準備段階において用意しなければならぬでしょう。

現在、なによりも必要なことは、現実の相継起してくる諸斗争にとりくみ、結集のはばをひろげるとともに、統一体としての一体感を実践的に作りあげて行くことであります。

現在、われわれの内部をふりかへつてみると一番痛切に感じられることは政治行動主体としての「党」の実体的準備がほとんど進展していないことです。

われわれの政治組織方針の作成と、新しい組織統一体の実体的準備と新しい指導主体が全国的に出来あがつて行くこと、この話合に応じて、期待と決意もうまれ、われわれの独自の質も形成されるであろう。このような前進が、われわれの全体によつて目ざされることが肝要であると考えられます。

五 現在、七月乃至八月に予定されている全国代表者会議が上述のような組織統一活動の一つの重要な目標として成功的に持たれることが何よりも望まれます。

この機会に、さきの三月会議に参集しなかつたさらに広い人々の結集を得て、政党形態に

よる結集の必要、その民主的組織運営、独自の政治的立脚点と活動の方針が合議され、「結党」の時期だけでなく、その形態等について、将来のさらに広い結集に向つて開かれた発展性のあるものが形態が検討、選択されることが望まれます。

(六・一一)

九州地方組織統一準備会発足

― 結集と統一をめざす九州地方会議 ―

結集と統一をめざす共産主義者の九州地方会議は、六月五日熊本市で開かれた。会議には、東京から内藤事務局長が出席し、九州地方の活動家二十七名が出席した。

会議は地元熊本の本松山同志の司会ではじめられ、「こえ」「社革」から一名づつの議長団を選出して、内藤事務局長から準備委員会報告、佐賀の井上同志から、九州地方の会議を開くに至つた経過の報告が行われた。

内藤事務局長は、「まとめ」と「よびかけ」の基本点を説明し、それに基づく後の準備委員会の活動を報告した。井上同志は、この会議に、宮崎、大分の代表の出席がないが、すべての県に組織がつくれ、連絡のとれていること、全九州的なオルグ活動の経験にたつて、いたるところに同志のいることを報告した。

そのあと各県の代表が、それぞれ組織状況の報告と、それに基づく意見、準備委員会への要望などを述べた。

長崎県の代表は、八・六のころには組織統一ができると思い、全国の諸君がおしかけてくるのに事務所がなければこまるだろうというので、佐世保駅前に事務所を用意した。内藤事務局長の話だと十一月だということだが、いささかガツカリしたと、地方の同志の速かな組織統一への期待の大きいことを強調した。

(9) 鹿児島県の代表は、種ヶ島の宇宙センター設置計画にたいする闘争の状況を詳しく報告し、この会議で、この闘争方針を討議してくれというのではない、しかし、こういう問題一つとつても、全国的な力を結集してたたかわなければたたかえない状況がある、一日も

早く、実践的要求にこたえうる党的結集を進めてもらいたいとのべた。さらに準備委員会の活動報告を聞いたが、その歩みがまことにまどろっこしいと感じた。思想的・理論的一致のための努力は重要であるが、準備委員会の活動は空転しているのではないか。小さいことはおいて、大綱的な一致で団結し、地方の要望にこたえてもらいたい。また地方は地方で「まとめ」にもとづいて独自に努力しなければならないという決意を固めたとのべた。福岡県の同志は、党をほんとうに全国的につくるのには時間がある。二つの組織が結集しただけで党ができるというわけではあるまい。われわれが政治的影響力をあたえうる能力をつくりあげなければならないとのべた。

この意見にたいして、長崎県の同志は福岡県の同志は、現在つくる党を最初から理想的なものとしてつくりうとしているのではないか。今必要なことは、たとえ不十分であつても共産主義者が結集して一つの党をつくり、それを完成したものにする努力をすべきだ。自分の周囲の『路戦』や『こえ』の読者は、結党の早いことを切実にもめている。もたもたしては、これらの諸君の信頼も失われるとのべた。

熊本県の同志は、結集を急げという人々は多い。しかし、そういつている人々が、結集に参加するかどうかはわからない。それは準備委員会の活動でどういう党ができるか見ているのであつて、海のものとも、山のものともわからないという状況のもとでは組織活動はすすまない。この党が真に大衆闘争を指導しうる党になりうるかどうか、そこを見ていると思う。ところが、われわれのなかにも、『結集まち』の考え方があつて、大衆闘争のなかで党建設をすすめることが弱まつていると思う。最近代々木を離れる党員がふえてくるが、それが組織されないことを報告した。

福岡県の同志は、党的結集をしたのちに解決した方がやり安い問題と、結集過程でなければできない問題、結集過程でこそできるという問題とがあらう。準備委員会がもたっているように見えるのも、それだけの理由があるのではないか。その辺を理解した上で、できるだけ速に結集・統一を進めてほしいとのべた。

このような討論にもとづいて、全員一致して、速かに組織統一を実現するよう準備委員

会に要望することが確認された。

さらに、なぜ九州地方から準備委員が出ていないのかという質問と、九州地方の代表を準備委員に加えてもらいたいという要望が出された。内藤事務局長から、全国会議における準備委員選出の経過が報告された。その経過は了解するが、新しく九州地方的結集ができた以上、そこからの代表を準備委員に加えてほしいという要望がだされた。そして、そのことを全員一致して、準備委員会に要望することが決められた。内藤事務局長は、準備委員選出の経過、各組織のわりふりなどの関係から、それがすぐ可能かどうか確約はできないが、準備委員会に報告し、検討する旨を約した。

さらに、九州地方共産主義者組織統一準備会を組織することが決められ、次の準備委員が選出された。

阿南九州男、井上不二夫、江島陽太郎、島新治、津田昭知、波多然。

なお、会議では、準備委員会への要望として、日本共産党（代々木）の誤りにおいては、理論的な問題が非常に大きい。この点実践面とあわせて十分検討する努力をして欲しい。そのために、理論機関紙をだすことが要望された。また文学・芸術関係者の会議をもってもらいたいということも要望された。

(N)

国鉄中国地方共産主義者統一協議会

内藤事務局長を迎え懇談会を開催

国鉄中国地方共産主義者統一協議会は、六月六日広島市で、内藤事務局長を迎え、懇談会を開いた。

内藤事務局長から、「まとめ」と「よびかけ」で示されている情勢の「新しい転換点」の意義と、それに対応する共産主義者の結集と統一の重要性が話され、広島国労の現実の情勢のなかで、国鉄の合理化・近代化に応じた労務政策、これと対決してたかう上での問題点と、結集の重要性が、参加者からだされた。

社革以外の、この結集に参加してきた諸君からは、社革が出来た時、われわれは代々木

のなかで、これを批判した。われわれは、社革の発足をそのまま認めるわけではない。そこで、今度統一するという場合、全国的な観点から、その辺のところがあきらかにされ、全国的な中心部が、しっかりと団結をし、大丈夫なんだというところを実際に示さなければ、大衆的な信頼と支持をうることが出来ない。その点、準備委員会が早く作業を進めて筋を通して結党に進んでもらいたい。それでないと、地方の場合も、組合運動の次元での統一行動ということになり、それ自体も、中核が党的にしっかりと団結しないと、うまく前進しないという事態が生れているとして、結党の速かな実現が強く要望された。

なお、この懇談会で、国労全国大会の代議員選挙についての対策が協議された。